

黙示録21章1-8節 「すべての一新」

1A エルサレムの一新 1-4

1B 新しい創造 1

2B 天からの都 2

3B 神との居住 3

4B 死の滅亡 4

2A 万物の一新 5-8

1B 真実な言葉 5

2B 事の成就 6

1C 全てを司る方

2C ただで飲む命の水

3B 勝利者と第二の死 7-8

本文

黙示録 21 章を開いてください。私たちは前回、千年間のキリストの王国、地上における統治を見て、それから地も天も跡形もなくなった後で、白い大きな御座の前で、死んでいた者がよみがえり、裁きを受けて、火と硫黄の池に投げ込まれたところを読みました。そして私たちは今晚、21 章において、ついに新天新地、それから新しいエルサレムの幻を読んでいます。私たちが今日の箇所で学ぶのは、「すべての一新」であります。すべてが新しくなると、後で主ご自身が宣言されますが、キリスト者の信仰において、すべてが新しくなるということはどういう意味なのかを探っていきたいと思います。

ところで、私たちが黙示録全体を振り返りますと、それがイエス・キリストの啓示、現われであることを思い出します。1 章から 3 章において、イエス様は教会における主として、ご自分を示されました。イエス様が主権を持っておられ、教会において力ある方です。そして 4 章以降において、イエス様は、諸国において獅子である方と言ってよいでしょう。ユダの獅子と呼ばれましたが、諸国が暴れまくろうとも、王の王、主の主としてその怒りを静めさせる力を持っておられます。そして、21 章以降は、贖われた者たちの中で小羊として示しておられるところを見ます。全ての天と全ての地が過ぎ去り、この方を救い主として拒んだ者たちは火の池に投げ込まれた後、その残る者たち、贖われた者たちが永遠に、自分たちのために身代わりになって死なれ、血を流して犠牲となっただけだった小羊なるイエス様と共に過ごします。

1A エルサレムの一新 1-4

1B 新しい創造 1

1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

私たちは、イエス様が地上に再臨される時に、その地が刷新されることについて学びました。「このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。(使徒 3:21)」ここで、万物が改まるということをペテロが説教した時に、それは地上が刷新されることを話していました。一つのアパートの建物の大改築をするように、古びた建物を建て替えるようなものです。それは既存の天と地にあるものを、再び元ある通りに修復し、回復する働きです。ですから、主が六日目に人をご自分の形に造られて、地を支配しなさいと命じられた時と同じように、エデンの園にあったような環境にイエス様が回復してくださった世界であります。獅子が牛のように草をはみ、コブラの穴に乳飲み子が手を突っ込んでも、害を受けないような世界です。

しかし、「新しい天と新しい地」においては、刷新ではなく、完全な一新であります。この言葉が出てくるのは、イザヤの預言です。「見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先的事は思い出されず、心に上ることもない。(65:17)」ここの「創造する」という言葉は、ヘブル語の「バラ」です。これは創世記 1 章 1 節に使われている言葉であり、無から有を創造するということです。もう一つ、「造る」というヘブル語で「アサ」がありますが、それは「既に存在しているものから何かを造る」ことを表します。例えば、ダイヤのネックレスは造ることはできますが、ダイヤモンドの原石は、その物質は創り出すことはできません。それは、無から有の創造だからです。創造主なる神のみができます。

そのこと、全く新しい創造、再創造を主は今、ここで行われているのです。このことを、ペテロが第二の手紙で話していました。「そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。(3:12-13)」全ての天の万象が崩れ去り、溶け去ります。そして、全く新しく、天と地が造られます。完全な万物の一新であります。そして、その新天新地の特徴は「正義が住んでいる」とあります。神の正義が満ちているところであり、贖われて、栄光の姿に変えられた者たちだけが住むことのできる場所です。

そして、「以前の天と、以前の地は過ぎ去り」とあります。黙示録 20 章 11 節において、地も天もその御前から過ぎ去ったとありました。イエス様も、このことを強く意識して、ご自分のことばの確かさを語られました。「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることはありません。(マタイ 24:35)」ヘブル書の著者は、詩篇 102 篇を引用して、これが着物を着替えること

として語っています。「1:10-12 主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは着物のように古びます。あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることはありません。」

これは、まるで私たちキリスト者が、霊において、心において一新された時と似ていますね。古い人を脱ぎ捨てて、キリストに形造られた新しい人を身につけるべきであると、パウロは言いました(エペソ 4:22-24)。私たちが、どんなに変わろうとしても一向に自分を変えることができず、全く希望が持てない状況の中で、私たちの罪のために血を流してくださったキリストの御業によって、御霊によって私たちの新しい性質が与えられ、その神の性質において私たちが自分を変えることができるという希望ですね。このことは、実は将来における神の万物の一新における働きのミニチュア版と言うべき働き、あるいは、聖書的には「初穂」の働きであります。ある聖書教師が興味深いことを話しましたが、細胞の中におけるミクロの世界は、銀河系などのマクロ、宇宙の構造ととても似ていると指摘しました。同じように、私たちの中に神の一新する働きが始まり、そして後に、万物を同じように一新するという働きを行なわれるということです。

この万物の一新において大切なのは、私たちがこの世を愛してはいけないという戒めです。「1ヨハネ 2:15-17 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」世と世にある欲は滅び去ります。だから、これらのものを愛してはいけません。ロトの妻がソドムを愛して、ソドムから免れるはずだったのに、塩の柱になってしまったように世の欲から離れないといけません。しかし、主の御心を行なう者は、世が滅び去ることが起こっても、びくともせず、永らえることができるということです。

そして、「もはや海もない」とあります。20章において、海の中に死者がおり、死者がハデスから出されたとありましたが、神を認めない者たちがいるところとして海があります。17章においては、大淫婦が座っていたのは大水の上であり、それは、もろもろの民族、群集、国民、国語であるとあります(15節)。獣、反キリストも、13章によると、海から出てきていることが分かります。海は、このように不法と不正、罪が葬り去られているところとして描かれています。福音書にも、小さき者をつまずかせる者は、碾き臼をくくりつけて、海に投げ込まれたほうがましとありますし、レギオンが、湖の底に豚と共にだれ込んだところにも表れています。そして、ミカの預言の最後に、罪を海の深みに投げ入れてください、という言葉があります(7:19)。

そして、創世記の始まりを思い出してください。新改訳の第二版と第三版の訳が違いますが、それぞれで読んでみます。「1:1-2 初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。」「初めに、神が天と地を創造した。地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」大水がありました。その大水の下の部分が海と主は名づけられますが、ここには既に闇、すなわち罪や陰府を連想する存在となっています。これが無くなります。ですから、罪もなくなり、死もなくなり、陰府もなくなった世界です。新天新地は創世記 1 章 2 節よりも、さらにバージョン・アップした新しい秩序だということがお分かりになると思います。

2B 天からの都 2

2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

新しい天と地の次には、「新しいエルサレム」です。新しいエルサレムというからには、古いエルサレムがあるのですが、それはもちろん、地上にあるエルサレムです。そこも、ここにあるように聖なる都であり、主ご自身が住まわれるところでした。千年王国のエルサレムも、「聖徒たちの陣営と愛された都」と書かれていました(20:9)。しかし、それよりも上位にあるエルサレムがあります。パウロが、ハガイとサラの対比を使って、地上のエルサレムの他に、上からのエルサレムがあることを話しています。「ガラテヤ 4:25-26 このハガルは、アラビヤにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。」

天にある都について、旧約時代から、信仰の父祖であるアブラハム、またイサクやヤコブもこれを恋い慕っていたことを、ヘブル書の著者が述べています。「11:13-16 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。」そして、同じくヘブル書で、シナイ山に対比させて、天においてシオンの山があることを教えています。「ヘブル 12:22-24 しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。」

それが、天から、上からエルサレムが来るというのは、まさに神の御座のある天が降りて来るといことです。聖書において「天」というのは、神の御座があるところとして啓示されていました。あらゆる被造物、目に見える物には全く影響されない、神が王として治め、栄光をお受けになっているところとして現れています。「詩篇 115:2-3 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」神は目に見えない方ですが、しかし、だからこそ目に見える世界がどうなっていようと、それには全く影響されることなく、超越しており、むしろそれら目に見えるものをことごとく治めておられるところが、天にあります。それをコリント第二 12 章 3 節における、パウロが引き上げられて見た、「第三の天」であります。第三の天ということは、第二の天もあり、第一の天もあるということですが、第一の天は鳥や雲のあるところと言えるでしょう。第二の天は、「空中」とも呼ばれるところです。けれども、第三の天は神の御座であり、エゼキエルの預言によると、天のはるか上にあるところで(1 章)、それゆえ主は「いと高きところにおられる方」として呼ばれています。

「天から下って来る」という表現ですが、私たちが新しく生まれることをイエス様がニコデモに語られた時に、語られたことを思い出します。「ヨハネ 3:3 まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ここの「新しく生まれる」という言葉は、「上から生まれる」とも訳すことのできる言葉です。したがって、私たちの御霊による新生体験は、まさに将来の新しいエルサレムを前もって味わう、そのミニチュア版であることが分かります。

それから、「夫のために飾られた花嫁のように整えられて」とあります。この世にあった大きな都は、獣の上に乗った、地上の王たちと不品行を行なう大淫婦として描かれていたことを思い出してください。花嫁がそのように着飾っているでしょうか？結婚式の花嫁が、売春宿にいる女のような服を着ているでしょうか？いいえ、その衣装は、純粹、純白であり、花婿のために貞潔を守ってきたその姿です。イザヤの預言にも、同じように花嫁のように着飾っている姿が出てきます。「苦しめられ、もてあそばれて、慰められなかった女よ。見よ。わたしはあなたの石をアンチモニーでおおい、サファイヤであなたの基を定め、あなたの塔をルビーにし、あなたの門を紅玉にし、あなたの境をすべて宝石にする。(54:11-12)」教会は、小羊の妻となるべく、準備されている花嫁であります。パウロがコリントにある教会に対してこう話しました。「2コリント 11:2 というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。」

3B 神との居住 3

3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、(また彼らの神となり)

神の究極の人間に対する目的が、ここで実現しています。それは、神が人と共に住むということです。神が独り子をご自分の懐に永遠の昔から入れておられるように、ご自分のかたちに造られた人を、ご自分のところに住ませることが目的でした。それが、エデンの園で行われようとしたのですが、罪を犯したために園からアダムとエバが追放されました。それゆえ、神はご自分の家を人に提供しようとしてこられました。ヤコブに対して、天のはしごの夢を見せて、ヤコブはそこを「神の家だ」ベテルと名づけました。そして、モーセに対して地上の天幕の型を示し、その至聖所の贖いの蓋、ケルビムの間からご自身が語られるとしました。そして、ソロモンがその寸法の二倍の神殿を建て、そしてイエス様が現れたのです。

イエス様が人の姿、肉体を取られた目的を、黙示録を書き記した同じヨハネが言っています。「ヨハネ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」この「私たちの間に住まわれた」という言葉は、「私たちの間に幕屋を張られた」という言葉と同じです。イエス様を信じ、受け入れることによって、そこが聖所となり、神と共に住むことができ、そして、その救いの完成においては、新しい天と新しい地において共に住むということを実現できるのです。ヨハネの福音書には、留まるという言葉、また「あなたが、わたしにうちにおり、わたしがあなたのうちにいる」という言葉を、イエス様が頻繁に使われたことを読みます。これは、霊において一つにされていること、すべてのものを共有し、交わっていることを示しています。私たちは、聖餐式において、イエス様の血、イエス様の肉にあずかることによって、イエス様と一つにされていることを示しているのです。そして、このことが全宇宙的に実現するというのが、天からのエルサレムが降りて来ることの目的です。

そして、「彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、(また彼らの神となり)」という言葉は、その親しみを示している表現ですが、エレミヤ書 31 章 33 節にある新しい契約にも使われている言葉でした。そこで罪が赦され、拭い去れることによって、そのような親しい関係に入ることができることを約束しています。そして、「民」として一つにくられていることにも注目です。聖書は、一貫して個人主義ではありません。民でありますから、一つの家族、一つの集合体、共同体として私たちを捉えています。そして、これが一つの民とさせられたということがすばらしいです。キリスト教会が、男も女も、ユダヤ人もギリシヤ人も、自由人も奴隷もキリストにあって一つでありますし、また新しいエルサレムにおいては、贖われたイスラエル十二部族も神の民の一員になっています。神とキリストが一つであられるように、神の民もその交わりの中に一つになっています。

4B 死の滅亡 4

4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

究極の慰めが、新しいエルサレムにおいて実現します。「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」とありますが、これは、「死」が取り除かれることによって、死によってもたらされる悲しみ、叫び、苦しみもなくすということです。

人間にとって、もっとも不条理なことは生を受けたのに、死ななければいけないことです。ヨブのことを思い出してください、彼はとてつもない苦しみの中に入れられた時に、自分の生まれてきた日を呪いました(3章)。人は元々、死ぬために生まれていなかったのです。アダムとエバは、死ぬようには造られていませんでした。罪が死をもたらしただけです。この苦しみをよく表しているのが、あのラザロの死においてです。「ヨハネ 11:33-38 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか。」と言う者もいた。そこでイエスは、また心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。」イエス様の流された涙、そして心の憤りは、死そのものに対する憤りです。それで、イエス様は大声で、「ラザロよ、出て来なさい」と叫ばれたのです。

パウロは、最後の敵を「死」と位置付けています。「1コリント 15:24-26 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。」最後の最後まで残っていたものが、死でありました。ですから、最後の審判において、「死とハデス」を火の池に投げ込まれたのです。

そして、「以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」と述べています。これは次の、御座からの言葉へつながっています。すべてのものを新しくされたので、死によってもたらされた、涙、苦しみ、悲しみ、嘆きというものが全て過ぎ去ります。ある方が、「私たちの記憶というものは、どうなるのでしょうか？」という質問を受けたことがあります。私たちは、自分が自分であるということが、御霊の新生によって変わるということにはなかったと思います。人格が変わることはありませんでした。ここで以前のものが過ぎ去るというのは、記憶そのものがなくなるということではなく、「以前のものが、恵みによって見ることができる」ということでありましょう。どんなに罪が増し加わろうとも、恵みはそれに増して溢れてくれるという原則です。ヨセフが、兄たちは自分に対して悪を働いたが、神は私をエジプトに遣わし、ヤコブの家族を救うことを考えておられたのだということを話しましたが、すべてのことが神の慈しみによって計らわれていたことのみを知ることができることだと思います。

2A 万物の一新 5-8

1B 真実な言葉 5

5a すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」

ここから、御座に着いておられる方、神とキリストご自身の言葉です。「見よ。」という言葉から始まっています。注目させています。そして、「わたしは、すべてを新しくする。」であります。この言葉で思い出すのが、パウロの言葉です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5:17)」パウロのこの発言は、実に偉大なものです。私たちが霊的に新生したことを話しているだけではなく、万物が一新することまで含んでいるからです。クリスチャンになったばかりの時に、すべてが新しく見えた時がありました。同じ風景なのに、輝いて見えたのです。御霊による新生というのは、被造物が全く変えられる、新たにされることの初穂、始まりなのだ。私たちの中に、将来の希望、宇宙も全てが変えられるのだという小宇宙を持っていると言ってもよいでしょうか？

5b また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

あまりにもおいしい話です。良すぎて、おいしすぎて、信じられないかもしれません。だからこそ、主ご自身が今、太鼓判を押しておられるのです。この、あまりにもすばらしい約束を真実の言葉として受け入れなさいということです。

2B 事の成就 6

1C 全てを司る方

6a また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。」

「事は成就した。」という言葉ですが、イエス様が十字架の上でも同じような言葉を語られましたね。「ヨハネ 19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして、頭を垂れて、霊をお渡しになった。」ここにおいても、同じです。イエス様が贖いの業を完成されましたが、その時に、ここにおける事が成就したということまで含めて、お語りになられていたのだと思われます。救いは、主にあって新天新地、新しいエルサレムまで含めており、それは小羊なるイエス様において成就しています。

そして、「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。」という言葉であります。イエス様ご自身が 1 章においてそうご自身をお呼びになっていました。イザヤの預言でも、この最初、最後の言葉を主なる神が使われています。つまり、初めから終わりのことまでを知っておられ、支配しておられるということです。私たちは、この狭間に生きています。既に完成された救

いを受け取っていますが、まだ完成していない中に生きています。

2C ただで飲む命の水

6b わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。

主は、黙示録をヨハネに書き記させたご目的を、21 章また 22 章でお語りになられていきます。これは、教会に永遠の命の確信を持たせるためであり、そしてこれから救いを受け入れる人々にも呼びかけている、つまり伝道をしておられるのです。この言葉は、最も単純な形で福音を宣言している言葉です。人間は渇いています。神はいらないと言っている者も、生ける神を慕い求めて、あえいでいます。空白を埋めるために、いろいろなことをします。それは、「いのちの水」を求めているのであって、キリストにある神との関係が、その水なのです。サマリヤの女に対して、イエス様が言われました。「ヨハネ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

3B 勝利者と第二の死 7-8

7 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。

ここの「勝利を得る者」とは、イエスがキリストであり、神の御子であると信じる者たちのことです。ヨハネは手紙の中で、「世に打ち勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。(1ヨハネ 5:5)」と言っています。そして、七つの教会に対する、勝利者へのイエス様の言葉を思い出してください、その数多くのものが、新しいエルサレムにある分け前でありました。「2:7 勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」

8 しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

主は、ここで厳粛な警告を行なっておられます。20 章の最後に、火の池、第二の死についての啓示がありましたが、新しいエルサレムの啓示の中にも、主はこのことを忘れてはいけないことを教えておられます。これは、預言者たちにも示されていたことです。イザヤの預言では、新しい天と新しい地のことの宣言が、66 章 22 節にあります。「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、..主の御告げ。..あなたがたの子孫と、あなたがたの名もいつまでも続く。」けれども、24 節にはその反対のところにいる者どもについて、宣言しておられます。「彼らは出て行って、わたしにそむいた者たちのしかばねを見る。そのうじは死なず、その火も消えず、それはすべての人に、忌みきらわれる。」私たちが、何をもって生きて行かなければいけないのか、その世界観をしっかりと持たねばならぬでしょう。永遠の命の希望だということです。そして、永遠

の滅びから免れる、救われることなのだという事です。

ここの、「おくびょう者、不信仰の者」というのが筆頭になっていることを注目してください。恐れて主に近づかない、それで信じないという者です。一タラントを受けたしもべも、主人を恐れて、関わりを持つともしませんでした。そのために、心が墮落したままであって、それで、いかに並べられた偽りの行動があるのです。そして、これらが具体的であることも知る必要があります。私たちが、悪い行ないについて、具体的に明らかにされており、それらを行なっても救われるのだという偽りの保証はないのだということです。自分自身を吟味する必要があります、自分の行ないが天からの賜物なのか、それとも地獄に属しているものなのか？ということです。